

日本語における初期の形態的使役に影響する 要因に関する予備分析

野 村 潤

1. はじめに

本研究は、日本語児と母親による形態的使役の使用実態を探るための予備研究である。使用率、2種類の形態的使役の使い分け、個人差、インプットの影響といった観点から、日本語児3名の自然発話データを分析する。

1.1 使役の分類

使役は、「ある活動が何らかの事態を引き起こして、その活動を受ける人や物に状態の変化や場所の移動が起こること」(鈴木, 2015, p. 153)と定義される。日本語を含む様々な言語において、使役を表現するための形式は、語彙的使役と文法的使役に大別される(例えばO'Grady, 2002)。語彙的使役においては、語彙項目自体が使役の意味を持つ。例えばコワレル *koware-ru* という事態を引き起こす表現として、コワスが存在する。コワスは、形態素に分割するなら *kowas-u* となる。*kowas* という語幹に *-ru* という活用語尾が付いて *kowas-ru* となり、さらに *sr* という子音連続を避けるために *r* が脱落した形である。ここでは、単一の構成要素が使役の意味だけを担っているということはない。つまり、コワスという語彙項目自体に使役の意味が含まれるため、語彙的使役である。それに対して、文法的使役においては、使役の意味だけを担当する形態素や単語が存在する。例えばコワレサセルという表現は、*koware-sase-ru* の3つの形態素から成り、*-sase* という特定の形態素が使役の意味だけを担うと分析

されるため、文法的使役、その中でも形態的使役に分類される¹⁾。本研究では、日本語を母語とする子どもと、その母親が発する形態的使役を主な分析対象とする。

なお、日本語の使役形態素 *-sase* は、語幹が母音で終わる母音動詞につく場合は *-sase* だが (例えばコワレサセル *koware-sase-ru*)、子音動詞につく場合は最初の *s* が脱落して *-ase* となる (例えばタタセル *tat-ase-ru*)。このため、本研究ではこの形態素を *-(s)ase* と表記することとする。さらに、*-(s)ase* には、異形 *-(s)as* が存在する (*koware-sas-u*, *tat-as-u*)。本研究ではこの2種を区別して分析を行うため、その違いについて第1.2節で概観する。

1.2 日本語の形態的使役

上述のように、日本語の使役形態素には上述の *-(s)ase* と、その異形 *-(s)as* が存在する。高見 (2011) は、*-(s)as* が、関西地方の話しことばで広く用いられることを指摘しつつも、現代では「共通語」でも、やや口語調の響きがあるとはいえ、一般に用いられると述べている。

同一話者が同一の動詞について *-(s)ase* と *-(s)as* の両方を用いる場合、その使い分けについては様々な説明が存在するが、総合的に考察した高見 (2011) による説明は、3点に集約される。まず、自動詞に対応し、語彙的使役を担う他動詞が存在しない場合 (例えば自動詞ヒカルに対して*ヒケルという他動詞は存在しない)、形態的使役のみが用いられる。その際には、*-(s)as* を用いた方が、使役主の、使役事象に対する強制性が高い傾向がある。例えば (1a) では、被使役主として「ゆきちゃん」が、(1b) では「母親」がより適切であるように思われる。

(1) a. <-(s)as形>

 やんちゃ坊主の太郎が、また [ゆきちゃんを／母親を] 泣かした。

b. <-(s)ase形>

やんちゃ坊主の太郎が、また「ゆきちゃんを／母親を」泣かせた。

(高見, 2011, p. 161, 下線は筆者)

これは、被使役主が友達「ゆきちゃん」の場合、使役主が被使役主に直接的に働きかけた結果、後者が高い強制性を持って泣かされたという解釈が成立しやすいためと思われる。その高い強制性が、-(s)asと馴染みやすいというわけである。一方で母親が被使役主の場合は、太郎が直接的に母親に働きかけたという状況よりも、太郎のやんちゃな振る舞いが他人に迷惑をかけ、そのことを母親が嘆いて泣いたというような、間接的で強制性の低い使役事象が想定されやすいため、-(s)aseとの共起がより自然に聞こえる、と説明できる。

高見の説明の2点目は、使役主が無生で、当該事象の原因となっているにすぎない場合に関わる。そのような場合は-(s)aseが好まれるという(2)。

(2) a. <-(s)as形>

(?) 今回の業績の悪化は社員のやる気をしほめますでしょうね。

<-(s)ase形>

b. 今回の業績の悪化は社員のやる気をしほませるでしょうね。

これも、無生の使役主は強制の意思を持ち得ないことから、当該事象は強制性が低く、-(s)aseと馴染みやすい、という説明が可能である。

以上2点を含め、-(s)ase使役と-(s)as使役の使い分けの一般的な傾向として、高見は、「使役主の被使役事象に対する関わりや被使役主への働きかけが強ければ、『-さす』使役が用いられやすく、それが弱ければ、『-させる』使役が用いられやすい」(p. 164)とまとめている。(3)に高見の例を挙げる。

(3) a. <-(s)ase形>

自分を燃えさせてくれる横綱が、突然いなくなって残念です。

(白鵬の言葉)

b. <-(s)as形>

?自分を燃えさしてくれる横綱が、突然いなくなって残念です。

(高見, 2011, p. 164, 下線は筆者)

(3) の2つの文の許容度の違いは、横綱が白鵬を「燃えた」状態にするという事象の強制性が低いから、と説明できる。

1.3 使役の獲得に関する先行研究と本研究の目的

日本語児は形態的使役をかなり早期から産出することが分かっており、本研究で分析したデータでも (第2.1節参照)、2歳から観察されている (4)。

(4) これ赤ちゃんにご飯食べさせて、はい。 (Nanami, 2:09.21²⁾)

使役の獲得については、観察研究 (例えば伊藤, 1990; Murasugi, Hashimoto, & Kato, 2005)・実験研究 (例えばOkabe, 2007, 2008) ともになされてきており、他動詞獲得との関連 (伊藤, 1990; Murasugi et al. 2005)、依頼を表すテ形との共起 (タバサセテなど; Shirai, Miyata, Naka, & Sakazaki, 2000, 2001)、語彙的使役と形態的使役の違い (Okabe, 2007, 2008) といった観点から分析や実験が行われてきた。しかし、格助詞や語順など、他の文法項目に関する獲得研究と比べると、その数は多くない。また、数量的に、かつインプットまで含めて実態を調査した観察研究は限られる (ただし、数量的調査としてはShirai et al., 2000, 2001などが挙げられる)。さらに、-(s)ase形と-(s)as形の使い分けに至るまで考慮した研究となると、ほとんど存在しないと思われる。しかしながら、子どもが形態的使役を耳にする頻度 (インプットの頻度)、自ら使用する頻度に加え、それらの点に関する個人差を調査しておくことは、使役獲得研究の基礎データとして重要になるであろう。加えて、使役に関する実験を行う際、子どもが特定の動詞に関して-(s)as形に親しんでいるのに-(s)ase形を用いて実験を行ったりすることで、能力が正確に測定できないといった事態も想定

されるため、使い分けについて何らかの一般的な傾向や個人差が存在するかどうかを観察することも意味があると言える。

以上の考察を踏まえ、本研究は、(5)に挙げた4点を探るため、日本語児3名（1～5歳）と母親の自然な会話を予備的に分析することを目的とする。

(5) <研究課題>

- a. 使役の使用頻度について5歳までの子どもと母親に違いは見られるか。
- b. 母親と子どもは強制性の程度で-(s)ase形と-(s)as形を使い分けているか。
- c. (5a, b)の2点について、個人差は見られるか。
- d. (5a, b)の2点について、インプットの影響は見られるか。

2. 分析方法

2.1 データ

本研究では、Child Language Data Exchange System (CHILDES; Oshima-Takane, MacWhinney, Shirai, Miyata, & Naka, 1998; MacWhinney, 2000)のアーカイブに含まれる、MiiProデータ (Miyata, 2012a, 2012b; Miyata & Naka, 2014; Oshima-Takane & MacWhinney (編), 1995)を使用した。MiiProデータは、東京近郊の4名の子どもと、主に母親との自然な会話を長期にわたって記録した縦断データである。対象児は男児2名 (Asato: Nisisawa & Miyata, 2009a; Tomito: Nisisawa & Miyata, 2009b)、女児2名 (Arika: Nisisawa & Miyata, 2009c; Nanami: Nisisawa & Miyata, 2009d)である。ただし今回は、使役の形態素の検索を確実かつ容易に実行するため、形態素情報が付された、Arika, Asato, Nanamiの3名のデータを分析対象とした³⁾。Arikaデータには3～5歳、AsatoデータおよびNanamiデータには1～5歳のデータが含まれる。収録頻度はおよそ週1回から月1回であるが、一部2ヶ月に1回となって

いる。Arikaデータについては、母親との会話のデータと父親との会話のデータが公開されているが、前者のみを対象とした。

発話分析プログラムCLANのMLTコマンドを使用して算出した、今回の対象児3名と母親が産出した発話数と単語数は表1の通りである。Arika、Asato、Nanamiの総発話数はそれぞれ50667、35664、33270であった。総単語数は147315、59478、65144であった。3名の母親の総発話数はそれぞれ41845、58963、66035であり、総単語数は128161、179789、187297であった。

2.2 分析対象から除外した動詞

表1. 各対象児と母親の発話数(上段)と単語数(下段).

		1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	計
Arika データ	子	--	--	30528	17256	2883	50667
	母	--	--	87088	52918	7309	147315
Asato データ	子	9555	13978	7721	3956	454	35664
	母	8356*	25017	15978	9372	755	59478
Nanami データ	子	21869	21487	10141	4841	625	58963
	母	59657	68065	32906	17032	2129	179789
	子	7094	13333	6146	6184	513	33270
	母	5900*	27402	13884	16627	1331	65144
		22560	22667	10993	8962	853	66035
		58822	66221	33114	26673	2467	187297

*発話数よりも単語数が少ないのは、単語としてカウントされない発声を含む発話のためであると思われる。

使役を表す-(s)aseと-(s)asは、原則としてどの動詞とも共起するはずであるが、実際には-(s)asだけしか用いられないように見えるものがある。今回の分析対象から、該当する全ての動詞について、元の動詞、-(s)ase形、-(s)as形を(6)に挙げる。

- (6) a. 動く *ugok-u*/?*ugok-ase-ru*/*ugok-as-u*
b. 飛ぶ *tob-u*/?*tob-ase-ru*/*tob-as-u*
c. 乾く *kawak-u*/?*kawak-ase-ru*/*kawak-as-u*
d. 沸く *wak-u*/?*wak-ase-ru*/*wak-as-u*
e. 鳴る *nar-u*/?*nar-ase-ru*/*nar-as-u*

これらの動詞において *-(s)ase* 形が用いられない理由は、*-(s)ase* 形が、*-(s)as* 形に可能を表す *-(r)e* が付いた形と同一であるため、混乱を避けたいという話者の気持ちが働くのかもしれない (*ugok-as-e-ru*, *tob-as-e-ru*, *kawak-as-e-ru*, *wak-as-e-ru*, *nar-as-e-ru*)。あるいは、日本語史におけるこれらの動詞の起源や変遷が関わっているのかもしれないが、それを解説することは筆者の手に余る。いずれにせよ、実際の用法において、これらの動詞の *-(s)as* 形は、実質的に、もとの自動詞に対応し、語彙的使役を表現する他動詞として扱うことが適切であると思われる。それは、*-(s)as* 形にさらに *-(s)ase* を付加することが可能なことから確認できる (*ugok-as-ase-ru*, *tob-as-ase-ru*, *kawak-as-ase-ru*, *wak-as-ase-ru*, *nar-as-ase-ru*)。今回の分析では語彙的使役ではなく形態的使役を対象とし、また *-(s)ase* 形と *-(s)as* 形の使い分けも問題となるため、以上の動詞は分析対象にしないこととした。

2.3 強制性の程度の推定方法

本研究では研究課題の一つとして、対象児および母親が、使役事象の強制性の高低によって *-(s)ase* と *-(s)as* を使い分けているかどうかという点を挙げている (5b)。しかし強制性の高低について、発話内容から一貫性を持って判断していくのは困難である。そこで今回は、動作主と被動作主の有生性に着目して分析を行うこととした。強制の意思を持ちうる有生の動作主と、自分の意思を持ち得ない無生の被動作主が組み合わせられた時に強制性が高くなり、被動作主が有生の時には強制性が低くなる傾向が存在すると思われるからである。なお、今回の対象発話では、使役主は全て有生であった。したがって、被使役主

のみを有生性に関して分類することとした。

被使役主の有生性は、(a) 有生、(b) あいまい、(c) 無生の3種に分類した。このうち「あいまい」に分類されたのは、絵本の登場人物やぬいぐるみなどである。これらは、文脈によって有生として扱われることも、無生として扱われることもある。今回のデータに見られた例を(7)に挙げる。

- (7) a. 緑色もあるの、トーマス？ (Asatoの母親、2;07.30)
b. トーマスのいるイギリスに行ってください。(Asatoの母親、3;00.01)

どちらも機関車のキャラクターであるトーマスについての発話であるが、(7a)においては動詞アルが使われているのに対し、(7b)ではイルが使われている。つまりトーマスは(7a)では無生、(7b)では有生として扱われていることになる。

2.4 分析の手順

分析にあたっては、各対象児と母親の発話を対象とし、使役形態素を表す文字列CAUSが形態素情報に含まれている発話を検索した。検索でヒットした発話の中から、(a) 第2.2節に挙げた動詞を含む発話、(b) 歌詞の一部や絵本の読み聞かせ部分など、自発的でないと判断される発話、(c) 不明瞭な発音などにより動詞が判別できない発話を除外した。その後、各発話について、(i) 使われている動詞、(ii) -(s)ase と -(s)as のどちらが使われているか、(iii) 被使役主の有生性(第2.3節参照)についてコーディングを行った。

3. 結果と考察

3.1 頻度

表2に、3名の対象児と母親の、形態的使役の出現回数と、それを総発話数で割った使用率を示す。Arikaについては3～5歳の結果しか示せないため、

Asato、Nanamiについて、1～5歳の結果と3～5歳の結果を示した。以下では、対象児同士の比較が可能な、3～5歳の結果を中心に報告する。

表2. 各対象児と母親の形態的使役の使用回数と使用率。

			1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	1～5歳計	3～5歳計
Arika データ	子	使役数	--	--	20	9	2	--	31
		発話数	--	--	30528	17256	2883	--	50667
		使役率	--	--	.066%	.052%	.069%	--	.061%
	母	使役数	--	--	49	9	6	--	64
		発話数	--	--	25894	13864	2087	--	41845
		使役率	--	--	.189%	.065%	.287%	--	.153%
Asato データ	子	使役数	0	1	7	3	0	11	10
		発話数	9555	13978	7721	3956	454	35664	12131
		使役率	.000%	.007%	.091%	.076%	.000%	.031%	.082%
	母	使役数	34	31	11	8	3	87	22
		発話数	21869	21487	10141	4841	625	58963	15607
		使役率	.155%	.144%	.108%	.165%	.480%	.148%	.141%
Nanami データ	子	使役数	0	3	2	1	0	6	3
		発話数	7094	13333	6146	6184	513	33270	12843
		使役率	.000%	.023%	.033%	.016%	.000%	.018%	.023%
	母	使役数	36	10	4	12	1	63	17
		発話数	22560	22667	10993	8962	853	66035	20808
		使役率	.160%	.044%	.036%	.134%	.117%	.095%	.082%

Arikaについては1～2歳のデータが存在せず、Nanamiについては1～5歳で6回しか形態的使役を発していないため、使役の使用率に関して発達の变化を観察することは困難であるが、比較的安定して使役を使用した3～4歳のAsatoのデータを見る限りでは、3歳ごろから使役の使用率が上昇する可能性がある。

各対象児と母親の3～5歳の使用率が有意に異なるかどうかを検証するため、フィッシャーの正確性検定を行った。その結果、ArikaとNanamiについて母子の使用率が有意に異なっていた（Arika対母親: .061%対.153%, $p < .001$;

Nanami対母親: .023%対.082%, $p = .037$)。Asatoと母親については有意な違いは観察されなかった (.082%対.141%, $p = .211$)。Asatoについて有意な差が検出されなかったとはいえ、3～5歳のデータを見る限り、どの母子についても使用率に大きな違いが観察される。これは、2歳ごろから出現するとはいえ、形態的使役の完全な獲得は5歳以降になることを示唆している。

使用率について対象児同士を比較してみると (Arika .061%; Asato .082%; Nanami .023%)、どのペアでも有意な違いは検出されなかった (Arika対Asato: $p = .428$; Asato対Nanami: $p = .052$; Arika対Nanami: $p = .132$, フィッシャーの正確性検定)。母親については (Arika母親 .153%; Asato母親 .141%; Nanami母親 .082%)、Arikaの母親とNanamiの母親の間にも有意な差が検出された (Arika母親対Asato母親: $p = .809$; Asato母親対Nanami母親: $p = .0182$; Arika母親対Nanami母親: $p = .105$, フィッシャーの正確性検定)。以上をまとめると、Nanami母子については比較的使用率が低いが、大きな個人差が存在することを示す結果ではなく、ここでも、使役の獲得については個人差より子どもの年齢や発達段階が重要な要因になっていることが示唆される。

3.2 *-(s)ase*形と*-(s)as*形

次に、*-(s)ase*形と*-(s)as*形の使い分けについて見ていく。第2.3節で述べたように、今回は、使役主が有生で (今回の対象発話は全て使役主が有生であった)、被使役主が無生の場合に強制性が高くなる傾向があるとの仮定に基づき、被使役主を有生・あいまい・無生の3タイプに分類し、各タイプについて、*-(s)as*の使用率を算出した。結果を表3に示す。Arikaについては3～5歳のデータしか存在しないため、Asato、Nanamiについても3～5歳のデータのみを示している。

表3. 対象児3～5歳のデータにおける被使役主の有生性による-(s)ase率.

		被使役主の有生性				計
		有生	あいまい	無生	不明	
Arika データ	子	62.5% (5/8)	0.0% (0/9)	50.0% (7/14)	(なし)	38.7% (12/31)
	母	6.3% (1/16)	26.1% (6/23)	0.0% (0/24)	0.0% (0/1)	10.9% (7/64)
Asato データ	子	0.0% (0/1)	50.0% (1/2)	0.0% (0/6)	100% (1/1)	20.0% (2/10)
	母	71.4% (5/7)	50.0% (1/2)	15.4% (2/13)	(なし)	36.4% (8/22)
Nanami データ	子	100% (2/2)	(なし)	100% (1/1)	(なし)	100.0% (3/3)
	母	37.5% (3/8)	50.0% (3/6)	0.0% (0/3)	(なし)	35.3% (6/17)

今回のデータでは、母子ともに、有生性による-(s)aseと-(s)asの明確な使い分けは観察されなかった。フィッシャーの正確性検定で、Asatoの母親のデータについてのみ、有生と無生の間に有意な差が検出されたが ($p = .022$)、有生の方が-(s)ase率が高いという、予測とは反対の結果であった。

被使役主の有生性と-(s)ase使用率について明確な傾向が見られなかった理由としては、第一に対象発話の数が少なかったことが挙げられる。しかしそれだけでなく、高見(2011)が指摘するように、強制性による-(s)aseと-(s)asの使い分けはあくまで傾向に過ぎず、多くの場合に交代可能であることや、方言などの要因も絡み合っていると思われる。また、使役主や被使役主の有生性だけでなく、非能格自動詞、非対格自動詞、他動詞など、動詞の種類も検討する必要があるようである。いずれにしても、より多くの発話を分析することは不可欠である。

有生性と-(s)ase・-(s)asの使い分けについて、数量的に検討することはできなかったわけであるが、動詞ごとの使用状況はどのようになっているであろう

か。ある動詞に-(s)aseと-(s)asのどちらを付加するかについて、母親の中で習慣化が生じており、その影響を子どもが受けるという可能性はないだろうか。表4は、1～5歳（Arikanのみ3～5歳）のデータにおいて、対象児と母親の両方が使役に用いた個々の動詞について、-(s)ase形と-(s)as形が用いられていたかどうかを+（使用あり）と-（使用なし）で示したものである。

表4. 1～5歳時に（Arikaのみ3～5歳）対象児と母親の両方が使役で用いた動詞に関する-(s)aseと-(s)asの使用の有無.

		-(s)ase		-(s)as	
		子	母	子	母
Arika	あう	+	+	-	-
データ	あそぶ	+	+	(-)*	+
	たべる	+	+	?**	+
	のむ	+	+	+	+
Asato	あう	+	+	-	+
データ	する	+	+	(-)	+
	はしる	+	+	-	+
	もつ	+	+	+	+
	やる	(-)	(-)	+	+
Nanami	あう	+	+	(-)	+
データ	たべる	-	+	+	+
	もつ	(-)	+	+	-

* (-)は、当該動詞が1回しか出現せず、その形の用いられようがなかったことを示す。

** 発音が不明瞭なためにどちらを産出したのかが不明なケースがあった。

表4の中で、対象児が用いているのに母親が用いていない形（つまり対象児+、母親-の形）は、Nanamiと母親のモツの-(s)as形（モタス）に限られる。つまり、子どものが-(s)aseと-(s)asのどちらを用いるか、もしくは両方用いるかは、母親の使用に依存している可能性があると言えよう。

4. 結論と課題

本研究では、日本語児と母親の形態的使役の使用実態を探るための予備調査として、主に使役の使用頻度および-(s)aseと-(s)asの使い分けについて、3名の縦断データを分析した。研究課題として以下の4点を設定した((5)を(8)として繰り返す)。

(8) <研究課題>

- a. 使役の使用頻度について5歳までの子どもと母親に違いは見られるか。
- b. 母親と子どもは強制性の程度で-(s)ase形と-(s)as形を使い分けているか。
- c. (8a, b)の2点について、個人差はどの程度見られるか。
- d. (8a, b)の2点について、インプットの影響は見られるか。

(8a)については、Asatoのみ有意な違いが検出されなかったものの、いずれの子どもも、3～5歳の範囲では母親より使役の使用率が低いという結果であった。(8b)については、強制性は使役主・被使役主の有生性とある程度連動するという仮定で、有生性による-(s)ase・-(s)asの使用状況を分析したが、どの子ども・母親についても明確な使い分けの傾向は見出せなかった。(8c)つまり個人差も、今回のデータでは明確には観察されなかった。(8d)については、インプットが子どもの使役使用率に大きな影響を与えているという結果は得られなかった。有生性と-(s)ase・-(s)asの使い分けについても同様であった。しかし動詞ごとに分析してみると、特定の動詞について、子どもが-(s)aseまたは-(s)asの形を用いているのに、母親は用いていないというケースはほぼ存在しなかった。つまり、ある動詞に、子どもが-(s)ase・-(s)asのどちらを付加するか(あるいは両方を使うか)については、インプットが影響している可

能性が示された。

母子間で使役使用率に差が見られたことから、3～5歳の子どもは、少なくとも頻度の点では-(s)ase形・-(s)as形を成人並みには使用できていないことが分かる。これは、使役の完全な獲得には5歳以降までかかる可能性を数量的に示している。また、(8d)についての結果からは、-(s)aseと-(s)asの用法について、子どもの知識の中で動詞ごとの「島」(Tomasello, 1992)が形成されていると言えるかもしれない。野村(2018)では、3歳の対象児が同じ日に3種類の動詞について使役を使用したことから、3歳の時点である程度の一般化された知識が獲得されているかもしれないと指摘している。しかし、今回の結果を見ると、高度に汎用的な知識の獲得には至っていないと思われる。

今回の分析は予備的なものとの位置付けであったため、様々な課題が残る。まず、対象発話の数が少なく、統計的信頼性の高い分析ができない部分が多かったため、より多くのデータを検討する必要がある。また、個人差やインプットとの関係を調査するには少数の子どもを長期にわたって追った縦断データが適しているが、個人差を超えた一般的な発達過程を調査するには、多くの子どもを短期間調査した横断データの併用も視野に入れる必要があろう。さらに、分析の精度の向上も課題である。まず、注2で言及したように、今回利用した、自動的に付与された形態素情報の信頼性について検討する必要がある。また、使役事象の強制性を推測するために今回は被使役主の有生性を用いたが、非能格動詞、非対格動詞、他動詞といった動詞の分類などを用い、より精緻に-(s)aseと-(s)asの使い分けについて検討していくことも必要である。

使役の-(s)ase・-(s)asの使い分けに関しては、成人の用法においても、方言などの要因が指摘され、また動詞によってある程度の偏りが見られる可能性がある。そのような中で、子どもが動詞間の垣根を超えた一般的な知識どのように形成していくのか、また最終的に獲得される知識に個人差が存在するののかといった疑問に、今後の分析で答えていくことが期待されよう。

註

- 1) 文法的使役は、日本語のように拘束形態素を使用する形態的使役と、英語の *make* のように自由形態素を用いる統語的使役に分類される。
- 2) 対象児の年齢は「歳: 月・日」の形式で表記する。
- 3) 形態素情報はJMORと呼ばれるプログラムにより自動的に付されたものであるため、手作業で対象発話を抽出した場合との食い違いが生じる可能性がある。今回は予備的分析であるためにこの点は許容することとしたが、対象発話を抽出する際の信頼性については今後の課題である。

参考文献

- 伊藤克敏. (1990). *こどものことば—習得と創造—*. 東京: 勁草書房.
- MacWhinney, B. (2000). *The CHILDES project: Tools for analyzing talk*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Miyata, S. (2012a). Nihongo MLU (heikin hatsuwachō) no gaidorain: Jiritsugo MLU oyobi keitaiso MLU no keisanhō [Guideline for Japanese MLU: How to compute MLUw and MLUm]. *Kenkō Iryō Kagaku*, 2, 1-15.
- Miyata, S. (2012b). CHILDES nihongoban: Nihongoyoo CHILDES manyuaru 2012. [Japanese CHILDES: The 2012 CHILDES manual for Japanese]. <http://www.2aasa.ac.jp/people/smiyata/CHILDESmanual/chapter01.html>
- Miyata, S., & Naka, N. (2014). JMOR06.2: The Japanese morphological analysis program based on CLAN.
- Murasugi, K., Hashimoto, T., & Kato, S. (2005). On the acquisition of causatives in Japanese. *Nanzan Linguistics*, 2, 47-60.
- Nisisawa, H., & Miyata, S. (2009a). *Japanese Asato Corpus*. Pittsburgh, PA: TalkBank.
- Nisisawa, H., & Miyata, S. (2009b). *Japanese Tomito Corpus*. Pittsburgh, PA: TalkBank.
- Nisisawa, H., & Miyata, S. (2009c). *Japanese Arika Corpus*. Pittsburgh, PA: TalkBank.
- Nisisawa, H., & Miyata, S. (2009d). *Japanese Nanami Corpus*. Pittsburgh, PA: TalkBank.
- 野村潤. (2018). 日本語児による初期の-(s)ase使役の性質. 京都女子大学人文論叢, 67, 47-62.
- O'Grady, W. (2002). *The syntax files* (ver. 8). Honolulu, HI: University of Hawai'i at Mānoa.
- Okabe, R. (2007). Bi-clausal? Mono-clausal? The acquisition of Japanese causatives.

- Proceedings of the Boston University Conference on Language Development*, 31, 462-473.
- Okabe, R. (2008). *Child causatives: Acquisition of bi-clausal structures in Japanese*. Doctoral Dissertation, University of California, Los Angeles.
- Oshima-Takane, Y., MacWhinney, B., Shirai, H., Miyata, S., & Naka, N. (eds.) (1998). *CHILDES for Japanese* (2nd ed.). The JCHAT Project, Nagoya: Chukyo University.
- Shirai, Y., Miyata, S., Naka, N. & Sakazaki, Y. (2000). The acquisition of causative morphology: why does it correlate with the imperative? In E. V. Clark (ed.), *The proceedings of the thirtieth annual child language research forum* (pp. 87-94) . Stanford, CA: Center for the Study of Language and Information.
- Shirai, Y., Miyata, S., Naka, N., & Sakazaki, Y. (2001). The acquisition of causative morphology in Japanese: A prototype account. In M. Nakayama (ed.), *Issues in East Asian language acquisition* (pp. 183-203). Tokyo: Kurosio.
- 鈴木孝明. (2015). 日本語文法ファイル—日本語学と言語学からのアプローチ—. 東京: くろしお出版.
- 高見健一. (2011). 受身と使役—その意味規則を探る—. 東京: 開拓社.
- Tomasello, M. (1992). *First verbs: A case study of early grammatical development*. Cambridge: Cambridge University Press.

キーワード

morphological causative, Japanese, acquisition, CHILDES